

# 主観年齢推定における若年視要因の分析

## Analysis of the factor of younger identity in estimation of subjective age

○東 泰宏<sup>1</sup>, 北岡 勇紀<sup>1</sup>, 片平 建史<sup>1</sup>, 藤澤 隆史<sup>2</sup>, 長田 典子<sup>1</sup>

(<sup>1</sup>関西学院大学 理工学部/感性価値創造研究センター)

(<sup>2</sup>福井大学・子どものこころの発達研究センター)

E-mail:nagata@kwansei.ac.jp

### 1. 緒言

自己がイメージする自分の年齢を主観年齢と定義し研究を行ってきた[1]。これまでに、自己若年視傾向が日本のみならず米国・韓国でも見られることや、その要因の1つとして記憶の中で年齢に基づく顔の平均プロトタイプが形成されることなどを確認した。本報告では絶対年齢推定課題(年齢付与課題)の国際比較を行い、若年視要因を分析した。

### 2. 方法

#### 2.1 実験参加者

日本人評定者 202 名(男性 94 名, 女性 108 名), 米国人評定者 124 名(男性 62 名, 女性 62 名), 韓国人評定者 104 名(男性 45 名, 女性 59 名)が絶対年齢推定課題に参加した。

#### 2.2 実験手順

呈示された顔画像について「何歳に見えますか?」(=How old do you think he/she is?)の評定を整数値入力でもとめた。

#### 2.3 他者の絶対年齢の推定法

先行して行った主観年齢推定課題の結果と比較可能にするため、絶対年齢推定課題より得られたデータを、同じスケール上にプロットする。x軸に実年齢差(=顔画像 - 評定者), y軸に顔画像に対する評定結果(=評定値 - 評定者の実年齢)をとる2次元平面に投影した。次に各評定者の分布データに対して線形単回帰分析を適用した。

### 3. 結果と考察

日本人, 米国人, 韓国人に共通して, 加齢に伴いバイアス値が増加する傾向が観測された(図1)。これまで, 加齢に伴うバイアス値は日本人の主観年齢推定における特徴的な傾向であると考えていたが[1], 本実験で3国籍ともに見られたことは, むしろ, この傾向は絶対年齢推定課題に共通した, 評定者に起因する顕著な特徴であったことが確かめられた。

さらに, 先行研究における主観年齢の結果を加え,

分散分析を行ったところ, 米国人においてのみ実験方法に有意な差が存在した。米国人は自己の内的な要因との切り分けができ, 実験方法における年齢推定の要因に違いが生じると考えられる。主観年齢に比べ, 絶対年齢において若年層が同世代をより老年視し, 中年層が同世代を若年視する理由として, 自己のみならず社会に望ましいとされる年齢に近づけようとする理想年齢バイアスが考えられる。また, 日本人, 韓国人においても同様の理想年齢バイアスが存在すると考えられるが, 常に相手との社会的関係性を意識しているため, 実験方法に差がみられなかったと解釈できる。

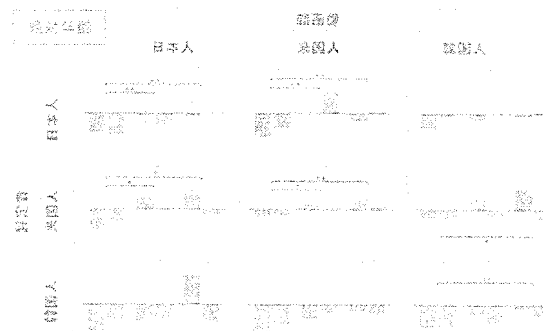


図1: 絶対年齢推定結果

### 4. 結論

本研究では, 主観年齢推定課題と絶対年齢推定課題の比較によって, 若年視要因の1つに理想年齢バイアスが関係することを示した。またこのバイアスは米国人でのみ顕著となり, 日本人と韓国人ではその社会的関係性のために陽に観測されないこともわかった。

これまでの主観年齢研究[1]を総括すると, 自己若年視要因には平均顔プロトタイプ, 自己謙遜, 理想年齢バイアスの3つが関与し, 主観年齢推定における国籍, 年齢層による差を生んだと結論付けられた。

### 参考文献

- [1] 東泰宏他 (2011). 顔画像を用いた自己の主観年齢の推定-顔の蓄積記憶の牽引による自己若年視傾向の検証-. 日本顔学会誌, 11(1), 117-122.